

2022年12月25日・佐土原キリスト教会・クリスマス礼拝説教**聖書箇所：ルカ福音書2章8～20節****タイトル：喜びを知らせに**

クリスマス、おめでとうございます。一緒にクリスマスをお祝い出来ることを神様に感謝致します。

激しい戦いが繰り広げられていた第一次大戦中のことです。(先週も「クリスマス休戦」の話をしました、YouTubeで少し違うバージョンを見つけましたのでご紹介します)。寒いクリスマスの夜、長い戦いに疲れ果てた兵士達は、塹壕の中で、銃を置いて温もりのあるクリスマスの思い出に耽っていました。すると一人の兵隊が歌い始めました。「きよしこの夜、星はひかり、救いの御子は…」いつしかそれは、夜空をゆるがす大合唱となりました。男達は、涙を流して大声で歌いました。繰り返し、繰り返し歌いました。その時です。はるか闇の中から、もう1つの歌声が聞こえてきました。敵の塹壕から、こちらの塹壕の讃美歌に答えて、もう1つのクリスマスの歌がわき上がったのでした。そしてその夜、銃声が止み、大砲には夜露が降りました。翌朝、兵士達は、おずおずと塹壕を出て行きました。1人、2人…やがて大勢の兵士になり、皆が塹壕から出て行って、敵である相手に近づき、互いに握手を交わし、食べ物を交換し、家族の写真を見せ合い、サッカーに興じることまでしました。こうして誰も予想することが出来なかった感動的なクリスマス休戦が、筋書きなしで実現したのです。その時、一発の砲弾が着弾して、兵士達は慌てて自分達の塹壕に帰りました。しかしドイツ兵の手には、イギリス兵からもらったチョコレートがしっかり握られていました。そのチョコレートが大写しになりました。実は、それはチョコレート会社のCM用ビデオだったのです。しかし、感動的なものでした。実際、そういうことがあったのでしょうか。

この話は、何を教えるのでしょうか。カナダの教会を助けて下さった韓国人の先生は、何度も戦場を経験された方ですが、一度しみじみと言われました。「どんなことがあっても、戦争はするもんじゃない」。彼らはそんな中にいたのでしょうか。混乱があったでしょう。恐怖があったでしょう。憎しみがあったでしょう。しかし彼らの心に、2000年前、家畜小屋で生まれたイエス様が宿った時、恐怖が平和に変わったのです。憎しみが溶かされたのです。そして思いもかけないことが起こったのです。戦場は、恐怖と混乱の世界でしょう。(今年、ウクライナ戦争を通して、私達もその酷さの一端を知らされました)。しかし恐怖と混乱の世界に生きているのは、戦場の兵士だけではありません。「恐怖と混乱」という言葉は相応しくないかも知れませんが、平和な世界に生きている私達も、皆それぞれに、健康のこと、家族のこと、生活のこと、仕事のこと、将来のこと、色々な不安や恐れを抱えて生きているのではないのでしょうか。皆さんは今年、どのようなところを歩いてここまで来られたのでしょうか。私達も、様々な問題を抱えます。でも聖書は、その私達にグッドニュースを語るのです。

今「ルカ2章8～20節」をお読み頂きました。イエスは、紀元前6～7年頃—(一般に紀元元年と言われますが、少しズレがあるようです)—イスラエルのベツレヘムでお生まれになりました。その時、その地方で羊の番をしながら野宿していた羊飼いのところに、天使が現れます。羊飼いは恐れます。羊飼いというのは、野宿を続け、体には獣の臭いがこびり付いています。当時、社会の底辺の人々だ、と言われました。また宗教の決まりを—(例えば「この日は出歩くな」という安息日の決まりを)—守ることが出来ません。「『羊飼いはならず者だ』と思われていた」という人もいます。それで人々からは「あの連中は神から遠い連中だ」と言われ、自分達もそう思われていたのです。9節に「主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼

らはひどく恐れた」(9)とあります。だから羊飼いは、ひどく恐れたのです。しかし主の使いは、その彼らに「喜びの知らせ」を告げたのです。「恐れることはありません…私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます…」(2:10~12)。羊飼いは、私達の代表です。その意味で天使が告げる喜びは、どんな人にも語られる喜びなのです。だから天使は「この民全体のため—(『全ての人』のため)—の素晴らしい喜び」(10)だと言いました。この喜びの与えられない人はいない、この喜びから洩れる人はいないのです。だからこれは、私達にも語られている喜びなのです。そして天使の「恐れることはありません」という言葉が象徴しているように、その喜びは「言わば私達の恐れさえ追いやるような喜び」だと言うのです。では、クリスマスは、イエスの誕生は、どんな喜びを語るのでしょうか。

私達は今年3月、長年良い交わりをして頂いた兄弟を天の御国にお送りしました。最後に礼拝に来られた時に証しをして下さいました。「自分の命を犠牲にして人を助けた神父の姿に神の愛を感じて、信仰を持ったこと、それ以来、肉親との別れ、仕事のこと、病気のこと、色々と辛いこともあったけど、神に守られて恵みの内に生きて来たこと」等々、そのご生涯の一端に私達も触れさせて頂きました。その兄弟が昨年、私が鬱を患っていた時、鬱のことはご存知なかったのですが、こう言われました。「先生、人生を謳歌して下さいよ!」。私は、その言葉の背後に、兄弟が歩いて来られた人生の重さを感じました。そしてその言葉が、その時の私には「先生、イエス様が先生と共におられるじゃありませんか。神様が守って行かれるじゃありませんか」という言葉として響いて来たのです。そしてギリギリに絞られていたような私の心に、ポッと光が灯ったような気がしたのです。

私は思うのです。私自身がそうだったのですが、私達は、1人で全てを抱え込んで、不安になり、恐れているのではないのでしょうか。ある本にこうありました。「私たちの生活には、自分の努力ではどうにもならないこと、取り返しのつかないことなどがしばしば生じます。自分の能力で解決できないこともたくさんあるのです」。自分ではどうすることもできないことがあります。誰かに助けて欲しいことがあります。しかしその時、「イエス様が共におられる、神が守って行かれるではないか」と思うことが出来れば—(そして、サメに左腕を食いちぎられた女性サーファーは事故の中で神を経験して言いました。「神は悪からさえ善を生み出して下さる」。それが本当なら)—それは真の希望であり、救いではないのでしょうか。

いずれにしても神は、不安や恐れを抱えて生きる私達に神様が、神の助けが、神の希望が必要だと知っておられたから、「旧約」の時代から「私があなたと共にいる」と言って来られました。「恐れるな、わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ 41:10)。「誰が傍らにいらなくても、わたしが共にいる」。神はそう言われ、人と生きようとして来られたのです。

しかし問題がありました。それは、人の側にそれが分からなかったことです。神が大き過ぎる方だから、人には神の思いが分かりませんでした。だから、羊飼いが神を恐れたように、むしろ神を恐れたのです。しかし、だからこそ救い主イエスは、赤子として地上に来て下さったのです。赤子は、お世話してもらわなければ死ぬしかない。そんな姿で人間の世界に—(人の悪意と醜さが渦巻いている世界に)—入って下さったのです。それは、赤子ならどんな人でも恐れなく近づくことができるからです。羊飼いは「みどりご」と聞いて、しかも「飼葉おけ—(家畜の餌を入れる桶)—に寝ておられる」—(「そんなに貧しい姿でおられる」)—と聞いて「さあ、ベツレヘ

ムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう」(15)と恐れることなく神に近づこうとしたのです。

岩淵まことさんというゴスペル・シンガーがおられます。彼の亜希子さんというお嬢さんは、小学校2年生で脳腫瘍のために天に帰って行かれるのですが、危篤の状態になった時に、岩淵さんは亜希子さんに聞くのですね。「アツ子、イエス様が見えるかい」。亜希子さんは、もう言葉はしゃべれませんでした、大きく頷くのです。そして、しばらくしてイエス様に抱かれて天に帰って行かれたのです。イエス様が人として、赤子として地においで下さったから、人は、どんなに小さい者でも、恐れなく神様に近づける、神の許に帰れるようになったのです。

そして長じたイエス様は、「父の財産を無理やりもらって、父の許を出て行き、他所の町で身を持ち崩して、ボロボロになって帰って来た息子を、喜んで迎える父の話」を教えて下さいました。父親は、ボロボロの息子に走り寄って、抱きしめて歓迎するのです。それは、私達が神の方を向くこと喜び、私達に走り寄って歓迎しようとされる神様の姿です。そんな神の真実を教えて下さったのです。またイエスは言われました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ 11:28)。それは、正に神様の私達へのメッセージでした。イエス様によって人々に神の真実が分かるようになったのです。人々が神様に手を延ばすことが出来るようになったのです。イエス様は、そのようにして私達を神様に結びつけて下さったのです。

しかし、それだけではありません。3月に召天された兄弟は「人は罪を犯さずには生きて行けないんですよ」と絞り出すように言われました。それは「仕事のために不本意なこともせざるを得なかった、そんな私も、キリストの十字架によって赦され、神の御手の中に生かされてここまで来たのです」という感謝の言葉だと思って伺ったことでした。そのようにイエス様は、その最期には、私達の神の前の罪を全部背負って、十字架に架かって下さったのです。そして神様と私達の関係回復を完成させ下さったのです。イエスは十字架に架かるために生まれて下さった、と言っても良い。

天使は歌いました。「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(2:14)。「御心にかなう人々」とは、「立派な人」ということではありません。『イエス様、私のために人の世に生まれて来て下さり、ありがとうございます』という人」ということです。それで私達は、神と共に生きて行けるようになったのです。神は、ずっと私達と共に生きたい、私達を助けたいと願って来られたのです。それが、時が来てイエスの誕生で現実になったのです。本当に神と共に生きることが出来るようになったのです。

しかも、9節の「主の使いが彼らのところに来て…」(9)という言葉は、「彼らの傍に立つ」という意味の言葉です。そんなに近くに来たのです。それは、神様が、私達が思う以上に近くにいて下さるようになったということです。作り話ではありません。聖書が語る真実です。ある女性の証しです。彼女は、仕事のために訪れたフランスである青年と出会い、やがて結婚しました。5年目に子供が与えられますが、妊娠7カ月の時、ご主人が末期の食道がんだと診断されました。ご主人は冬の寒い朝、息を引き取りました。彼女は暗闇の中で泣き崩れ、生まれた息子を抱え、5年間も引きこもって泣いていたのです。ある日、クリスチャンの友達がメッセージのテープを持ってやって来ました。そのテープには「恐れるな、恐れるな」という神のメッセージがありました。彼女はそれに心惹かれ、繰り返し、繰り返し、聞いたのです。しかし悲しみは癒えず、「今日こそ死のう」と玄関で泣きじゃくっている時、クリスチャンの友達が訪ねて来て、彼女のただならぬ様子を見て抱きしめました。その時、彼女の心の中に、あの「恐れるな」という声が響い

て来ました。その声は、彼女の中で渦巻くようにリフレインし、次の瞬間、彼女の心に大きな喜びが湧き上がって来たのです。彼女は友達にしがみついて叫びました。「どうしよう、どうしよう、嬉しくて、つかまっていなくて飛んで行ってしまいそう」。友達は、彼女が頭がおかしくなってしまった、と思ったそうです。しかし神のメッセージに心を開いた彼女に、神が語られた声だったのです。彼女は、誘われるまま教会に通い、聖書を通して「安心しなさい。もう大丈夫だよ、わたしがあなたと共にいるから」という神の語りかけを受け、そこから力をもらって生き直すのです。神と共に生きて行ける、それは私達を生かす力です。

しかし、それだけではありません。イエスは十字架に架かって死なれましたが、3日目に甦られたのです。そして「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(ヨハネ 11:25)と言われました。イエスを通して神と共に生きる者は「天国で永遠に生きる」という約束をして下さったのです。私達は誰も必ず死にます。しかし神の御手の中に入るということは、たとえ地上の命が終わろうとも、神の御手に抱かれて天国に凱旋出来るということです。召天された兄弟のご遺族が、先日、礼拝に参加されました。礼拝後、お嬢さんが話して下さいました。「イエス様が背負って下さったから、父はあんなに平安に召されたのですね」。そして兄弟が天国に凱旋されたことを確信しておられました。私達は、死にさえ希望を持って向かうことが出来るようになったのです。

「キリストが生まれた」という知らせは、「恐れるな、あなたは神と共に生きることが出来るようになったのだ、生きるにも、死ぬにも、神の中に希望を、力を見る事が出来るようになったのだ」という知らせであり、それは私達にとって素晴らしい喜びの知らせなのです。

英語で「クリスマス」は、「Christ-Mas(s)/キリストのミサ」と書きます。つまり「キリストを礼拝する」という意味です。羊飼いがイエス様のおられる家畜小屋に出かけて行ってイエス様を礼拝した、それが2000年前のクリスマスでした。2000年後の家畜小屋は教会です。ここに、赤子ではない、十字架に掛かれ、甦られ、今も生きておられるイエス様がおられます。私達がここで「神様、イエス様を送って下さったことを感謝します」と言って礼拝する時、私達は本当のクリスマスを経験するのです。

戦いで苦しんでいた兵士達がイエス様を見上げた時、そこに思いもしない素晴らしいことが起こりました。新しい年が始まりますが、私達にも、問題の中でイエス様を見上げる時に何かが始まる、私はそれを信じます。クリスマスの祝福が皆様の上にありますように、心よりお祈り致します。